

産経新聞

平昌五輪で活躍した日本人選手たちは、普段から地道な練習を重ねてきた。支援する企業や病院などは、金の使い方という点できれいな印象を残している。メダリス

引き合いに出されるのは、派手な浪費家の豊臣秀吉と、堅実な倭約家の徳川家康の対照である。吝嗇と始末、「ひち」と節約とは意味が違う。家康は、使うと

歴史の交差点

フジテレビ特任顧問 山内昌之



トが得た栄誉に対して各種の報奨金が与えられるのも喜ばしい。節約して蓄えてきた金を「こそ」といふときに使うのは、最も手本になる使い方であろう。日本史でよく

きにはよく使っている。関ヶ原合戦後に西軍の大名の没収高の80%以上を東軍の外様大名の加増に充てた。しかも、細かいことを言わずに、土佐や筑前という国単位で

倹約と吝嗇の違い

豪気に与えたものだ(山内「將軍の世紀」『文芸春秋』4月号)。家康は日常の倹約を心掛けていても、武將としてこそ先途といふときには出費を惜しまなかった。幕府の正史ともいふべき『徳川実紀』は、大坂の陣のとき、諸大名の軍勢30万に1日1500石ずつの兵糧米をよめるまい、前田や伊達には將軍秀忠が銀3000枚、家康が銀2000枚あわせて5000枚も与えたと記している。銀1枚をひとまず50匁金1両とすれば、現在の12万円となり60000万円を気前よく与えたことになる。また、人数を水増しして米を得よう

という大名も出たというが、家康は「節儉も時による。城中を攻める兵力の多寡の証拠は、米の配分によることなので、何事も多く与えるのが良策というものだ」と述べた(『東照宮御実紀』附録巻十四)。敵にこちらが雲霞のごとき大軍だと思わせ戦意を喪失させるといふのだ。政治や軍事の世界では、日常で節約を重ねても、たゞさん振る舞うときには金を惜しまないことが大事なのだ。それが政治的に効果を生み周囲に影響を及ぼすのである。

書家・工芸家の本阿弥光悦は家康について巧いことを述べている。家康は側室や女中も連れず、駿河から江戸に鷹狩をしながら出かけた。武家として「古風で優雅な珍重すべき品行」というべきだ。家康は無駄な出費を避け、下々に倹約の手本を示したかったのだ(『光悦』)。「そのようにして貴賤問わずに倹約をもつはらお示しいただき有りがたいことだ」と評価する一方、貴人が倹約しすぎると、織屋のような職人は生活の手段がなくなるのでないか、と金の流通を心配する。

貴人には貴人の倹約法がある。太閤は贅沢をとことん究めたにせよ、いつの時代でも倹約は人間が常を守るべき生活態度だと強調する。下々の者が苦しまない程度に倹約の在り方を示しながらも、消費と流通の微妙な緩急を為政者が理解しないと不景気に陥って大変なことになる。「倹約と吝嗇を取違へ候ものまま是あり候」(『本阿弥行状記』第一九段)というのは、古今東西の真理である。陶芸から刀剣の目利きまでマルチアール・ティストだった光悦の見方は、金融緩和がしきりに話題になる現代日本でも学ぶべき点がある。

(ちまうち まさゆき)